

Title	左傳の思想史的研究(津田左右吉著, 東洋文庫論叢第二十二)
Sub Title	
Author	杉本, 忠(Sugimoto, Tadashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.3 (1935. 12) ,p.166(532)- 169(535)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19351200-0166">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19351200-0166</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

して已まないものである。恐らく本書は幾度か版を重ね、一層充實完成されて近世經濟史概論の最高代表作となるであらう。私は其を期待し其前途をも祝福したい。(高木壽一)

### 左傳の思想史的研究

(津田左右吉著)  
東洋文庫論叢第二十二

周知の如く左傳は支那の所謂古典中最も浩瀚な文獻であり、従つてその眞偽と製作年代の問題は支那古代史に於ける最も重要な問題の一として、嘗て主として曆法上から、飯島・新城・橋本の三者宿の間に活潑な論争が行はれて居り、又海外にあつては、主として康有爲の劉歆偽作説を祖述したフランケと、言語學上の見地から之に反對したカールグレン、左傳の成立を分析してその所見を東大で講演しベルギーの支那學雜誌に發表されたアンリマスベロとがあつた。然るに最近著者は左傳中の各種の説話を思想史的に検討することにより、此の問題に新たなる光明を投ぜんとされたのであり、東洋文庫論叢第二十二として四六倍版七三七頁の堂々たる大冊として、その意見を發表されたのが本書である。

本書は先づ序説として、左傳に關する文獻上の記載を批判することによつてその述作の時代を考へ、魯の恭王の古文發見譚や、漢書儒林傳や劉向の別錄からとつたと云ふ左傳の學統の信じ難いことを論じ、左傳に關する確實なる文獻は成帝の時までしか遡り得ず、不明の作者の手になる稿本に、尹咸・翟方進及び劉歆の手が漸次加へられたものやうであるとし、左傳の作者と傳へられる左丘明は、國語の作者として傳へられた左丘が明を失したと云ふ

話から、左傳の事實上の作者によつてつくられたものであり、史記の十二諸侯年表に見える左丘明と左氏春秋の話や、論語公冶長篇の左丘明に關する孔子の言は何れも前漢末の補入なりとし、次に春秋の解釋法の古來の變遷として孟子・荀子・公羊傳・穀梁傳・董仲舒・劉向・劉歆等の考を記し、左傳が何れの段階にあるかを見、事件を詳記する左傳の特色が、「義」を説き褒貶譏刺を説いてきた戰國から史記篇述の頃までの考方と違つてゐることを指摘してゐる。

次いで本論に入つて左傳の特色をなす多くの説話(五霸に關するもの、晉楚の抗爭に關するもの、孔子及子産に關するもの、古帝王及諸侯の祖先に關する説話、儒教思想によつて作られた説話、卜筮及び占星術に關する説話)を一々、春秋の經、孟子、荀子、韓非子、呂氏春秋、公羊傳、韓詩外傳、淮南子、史記、漢書、管子、說苑、新序、現存の國語などに見える同じ主題の説話と比較し、また戰國時代から前漢末までの政治史及び思想史上の事實と對照することによつて、其の變化と發展との徑路を考へ、左傳がその間において如何なる歴史的地位にあるかを見、これを史記以後と斷じ、次に左傳の説話と、それによつて構成されてゐる左傳の全體のくみだてに現れてゐる左傳の思想(「霸者觀」、「霸者的戰國的精神と儒教思想との對立及び抱合」、「春秋の精神と左傳の思想との一致及び矛盾」、「禮に關する二面の思想」、「呪術祭祀と儒教道德との背反及び調和」、「道德觀及び歴史觀」と、さういふ思想を生み出した政治的社會的狀態、それが形成せられた徑路、及び其の歴史的地位とを考へ、戰國以來の思想も存するが、多くは

前漢後半期において著しく強められた思想であり、前記の述作時代を肯定するものであるとされてゐる。

終りに結語として、春秋の傳としての左傳の性質を述べ、それは公羊、穀梁二傳の如く寓意の説明に止らず、經の記載を細敘し補説した形であり、ある人物、ある事件に關して從來世に傳へられてゐた個々の説話を、春秋の一々の記載に結びつけ、之に道德的講説を加へ、全體として年代記の形を具へさせたところにあるとし、しかもかく左傳が一種の擬年代記であるばかりでなく、春秋に就いても、よし暗示的な筆法により何等かの思想を寄託する用意からとはいへ、事件そのものが解し難いまでもとの記録を節略する必要は無かつた筈であると云ふ點、戎狄に關する記載を歴史的事實と認め難いと云ふ點、又春秋が儒家の講説によつて始めてその意義の解し得られるものであるとすれば、それは本來儒家の經典として、儒家によつて作られたものであり、その述作も一つの學派として儒家が既に存在した後であることを示し、此の點からみて春秋述作の時期は、儒家の宗師としての孔子の時代からは或る年月を経過した後、即ち戰國初期とするのが妥當であらう。たゞ最後の獲麟の記事だけは漢初に附加されたものであらうとし、最後に前漢末期の儒教の状態を述べ、それが左傳の説話に反映してゐるとし、左傳は畢竟前漢末の一部の儒者が春秋の解釋に一新機軸を出さうとして著作したものであり、たゞそれだけのものであり、左丘明といふ架空の古人にそれを假托したのは公羊傳や穀梁傳を凌駕しようとするために他ならざるとされてゐる。

從來曆法上、或ひは言語學上からといった特殊研究、いはゞあ

る一部の記事、或ひはある限られた語のみに基く研究（もとより其々意義あることではあるが）のみしか存在しなかつた左傳に對し、遂に此の如き詳細なる本文批判の現れたことは、誠に斯界の爲に慶ぶべきことに違ひない。

併しながら、比較的公式的な特殊研究と異り、本書の如き研究にあつては、云ふまでもなく、一つ一つの材料が、一つ一つ條件を作り、前提を作つて、次第に結論を構成して行くのであり、しかも本研究の資料は最も異論の多い戰國秦漢の其である。恐く本書を礎石とし、對象として、又々活潑な論争が見られるのであるまいか。筆者はもとよりその任でなく、淺學にして、未だ此の問題に關し精細なる研究をなしたとは云へないのであるが、二三の疑問を述べれば、左傳の説話と最も多く共通の説話を有するのは史記のやうであるが、此の左傳と史記の同じ主題の説話の比較に於いて、著者は主として左傳に儒教的色彩の濃い思想の存在することによつて、左傳が史記に基き、之を潤色したものと斷ぜられてゐるのであるが、今暫く儒教的講説の部分を除外して、左傳と史記との文を比較すれば、左傳の古い表現、或ひは曖昧な表現は、常に史記によつて、普通の語、或ひは之を明瞭に説明する語に改められてゐるのであり、それは恰も吾人をして、史記が左傳を意譯したと云ふ觀を抱しむるのである。かゝる例はカールグレン氏も、同氏の文法的研究による左傳の戰國時代製作説を傍證する爲に多くの例を擧げてゐるが(On the Authenticity and Nature of the Tso Chuan)。そればかりでなく、この事實は著者の擧げられた諸例、例へば本書一五〇頁の例に於いても、著者の説とは

反對に、かへつて史記が左傳の曖昧な表現を敷衍したとも見られ、一六六頁・二六〇頁などの諸例は史記を不用意に左傳が書變へたとされてゐるが、史記が左傳の不合理を避けたとも見られるのであり、一七七頁の晉の文公說話に於て、史記では野人が土器中に盛つた食を進めたと云ふ話が、左傳では土塊を與へたことになつて居り、說話の徑路に於て、左傳の方が後の段階にあるものとされてゐるが、野人が土器中に食を盛るのでは何等不思議のない話であり、土塊とする所に將來晉の土地を得ると云ふ說話上の意味があるのであり、是又史記が苟も貴人に土塊をすゝめる筈はないとして、左傳を合理化したものはあるまいか。又嘗て橋本教授が、左傳が史記以前に存在した明證として(史學雜誌第三一篇八號六一七頁——)擧げられた箇所も、著者は何等それに言及することなく反對の見解を下してゐられるが(二六八頁)、此の箇所に關する限り全く著者の不用意を明示するやうであり、これらはあまりに既出論文を注意されない爲かと思はれる。もつとも著者は卷頭に於いて、曆法上の問題には觸れなかつたと辭つてはゐられるが曆法による論文と雖も、それ以外のことも述べられてゐるのであり、殊にカールグレンの、著者とは全く反對の結論を持つ前記論文など、著者が、些細な、しかも著者と類似の見解の場合にのみ同氏を引用してゐる以上(七三五頁参照)、既出論文としてそれに對する高見も述べて戴きたかつたと思ふ。

その他左傳の五行思想には、五行説の規定に矛盾するやうなものがあるものであり、これに對して著者は、說話を作るに當つて、五行思想そのもの、精神を忘れたものであるに違ひなく、そこに

も此の說話の新しく作られた徵證が見える(三〇一頁)とか、必しも五行説に拘束せられなかつた說話作者の態度から來てゐるらしい(三四一頁)等とされてゐるが、周知の如く、五行思想は呂氏春秋以來既にあらゆる事物に敷衍され、漢代に至つては、その最初から幾多のこれにかんする說話が存在し、淮南子には増々多く此の思想を見、以後前漢末に向ふに従つて、愈盛行したと認められる以上、著者の論ぜられてゐるやうな史記以後の左傳の作者にしても、尹咸・翟方進や、まして劉歆等が、五行思想そのものの精神を忘れたやうな說話を作るとは到底考へられないのであり、かゝる說話は、五行思想の未だ充分敷衍されなかつた戰國時代、少くとも呂氏春秋以前の說話として以外之を考へることは出來ないのである。或ひはかへつて之を以て古を裝つたものとする説が生ずるかも知れないが、漢代の儒者は洪範以來の五行説を決して新しいものと考へてはゐなかつた筈であるから、かく考へるは考へ過ぎとより思はれないやうである。

要するに、左傳を以て史記以後のものとして斷ぜられた著者の説には、筆者は尙多くの疑問を抱かざるを得ない。儒家の手になつた以上、左傳が史記に比して儒教的精神の多いのは當然であつて、孔子世家を立てた司馬遷は、成程儒家を尊重してはゐるが、太史公自序に於いて道家を之に勝るものとしたり、老莊申韓列傳に於いては、老子をして孔子をすら子供扱にさせてゐる位であるから、左傳の說話中、餘りにも多い儒教的講説は一切之を除外して、事件の要點のみを採つたとも見られないことではないのであり、若し左傳中の儒教思想が、著者の説かれる如く眞に前漢末のものである

つたとしても（ある思想が精確にある時代に至つて初めて現れたか、それ以前から存在したかは非常に証明に困難な問題ではあるが）それは史記以後の潤色によるものであるかも知れず、少くとも左傳の稿本とも云ふべきものは、史記以前に存在して、却て史記に材料を與へたものではあるまいか。かく解すれば、著者が後世の補入とされた史記十二諸侯年表の序中の語なども、抹殺する必要はないのであり、著者は自説を證する爲、尙多くの竄入を多くのテキストの中に指摘されてゐるのであるが、かくの如きは著者の論ぜられる漢儒の恣意な態度が、著者にまで依憑したのではないかと、やゝもすれば讀者をして不安を感じしめる憾もある。春秋に對する見解も、あれだけの論述では、前述の結論に導く必然性もないやうである。

以上かくの如き勞作に對して、あまりに禮を失した形であるが、多くの示唆と啓發とに富むこの大著が、爾後の左傳研究者に對し、如何に與ふるもの多く、且つ大なるかは、今更喋々するまでもないことである。（索引及び英文梗概付、定價七圓）（杉本忠）

### 元寇史料集（國民精神文化 研究所印行）

元寇史料は國民精神文化文獻（二）として印行されたもので、貴重な元寇史料を複製して二卷の巻物に收め、讀者をして直接原形に就いて研究し得るの便を與へたものである。別に附せられた元寇史料集解説は、本史料集閱讀上の指針である。

内容の第一は宏覺禪師祈願開白文（京都正傳寺所藏）であつて、

書評

これに於ては宏覺禪師その人の敵國降服を祈願する切々たる愛國心が窺はれ得る。第二の北山室地頭尼眞阿請文（石清水八幡宮司田中俊清氏所藏）に於ては、北山室の地頭職たる眞阿がその子や聿を激勵して外寇防禦に馳せ参ぜしめた悲壯な意氣や、井芹秀重が自ら歩行し得ざる八十五歳の老齡でありながら、六十五歳の嫡子以下を馳せ向はしめんとした決心など、當時の國民が男女老幼の別なく國難に當るの頼もしい精神を知ることが出来る。終の壬生官務家日記抄（京都帝國大學所藏）は弘安四年當時の日記であつて、その筆者は明らかでないが、これによつて當時異國降服御祈願のための二十二社奉幣、龜山上皇の石清水御幸、御參籠、公卿勅使の伊勢神宮御差遣、八陵に異國降伏御祈願の宸筆を籠め奉られし畏き御事蹟、軍勢召集兵糧米徵收のための幕府の奮勵などが窺はれ、舉國一致を以て國難に處した尊い精神を傳へるものである。かゝる古文書の普及によつて、日本固有の麗はしい精神を現代の國民に傳へんとするは、眞に時宜を得た企圖といふべきである。（有賀春雄）

### 勤王志士 贈從四位飯田忠彦小傳（武田勝藏著） 野史編者

有栖川宮家に勤仕し、勤王の志士として知られ、特に野史二百九十一卷の編纂を以て讚へられてゐる幕末の史家飯田忠彦の生涯と、その野史編纂の苦心とを敘したものであつて、著者は廣く忠彦關係の史料を調査せられ、多くの興味ある史料をそのまゝ掲げて平易なる説明を施し、容易に忠彦の偉大な業績を知らしめんと

（三五）

一六九